

山を育てる

仲間たち



#006

木谷 辰雄さん

Tatsuo Kiya

増毛町で10代から農林業に従事。地域活動にも積極的に参加し、留萌南部森林組合長などを務める。地域のリーダーとして森林所有者に森づくりの指導・助言を長く行っており、平成12年には北海道指導林家に認定されている。



「1本伐ったら10本植える」をモットーに、 多様な機能を発揮できる森をつくっています。

植林は「地球銀行100年満期の定期預金」

昭和3年生まれの木谷さんは、戦前戦後の激動する日本の林業を見続けてきた道内林家の長老です。尋常小学校高等科卒業後、父親が働いていた縁で御料林の全木調査の職を得て、樹木の種別、胸高直径や樹高の測り方、材積計算と歩留まりの見方など、森林施業のノウハウを現場作業を通じて先輩から教わり、実践で覚えていきました。

終戦間もないころ、購入した伐採跡地に残っていた木が高値で売れ、山のありがたさを実感。以来「夢中で造林地の補植と改植を繰り返し、収穫を夢見て山づくりに励んできました」と木谷さん。モットーは「1本伐ったら10本植える」です。

間伐や木材搬出などの森林施業は基本的に自家で行い、そ

の経験から、森林が持つ公益的機能の重要性を理解してきました。「自己山林の木は、山にあるうちは地球に住む人たちのもの。伐って初めて自分の財産になります。ですから、森づくりは地球銀行へ100年満期の定期預金をするつもりでやっています」。継続可能な森林施業技術として注目されている複層林施業も、昭和50年代にいち早く導入。多様な機能を発揮する森づくりと儲かる林業の両立で毎年伐採できる豊かな森林を実現し、その知恵を後進に伝えています。



「お魚殖やす植樹活動」の先駆け

山に木を植えてニシンを呼び戻すことも、早くから木谷さんが森林所有者や林業関係者に提唱してきたことのひとつ。現在、全国の漁協で行われている「お魚殖やす植樹活動」の先駆けといえます。実は、全道規模で漁協が展開している漁民の森づくり活動推進事業のスローガン「100年かけて100年前の自然の浜を」の生みの親は木谷さん。ここ数年、日本海沿岸でニシンの「群来」が見られるようになったことは、木谷さんの大きな喜びとなっています。

